



公務員がやらねば誰がやる

広島県庁 平岡 敏

(法学部 平成元年3月卒業)

広島大学法学部は、公務員志向の強いところといえよう。私もその中の一人であった。なぜ公務員なのか。給料は安い安定している、すなわち、民間企業の面接等では禁句とされている「安定志向」が、その要因であることは否めない。公務員の仕事に、燃えたる情熱と夢に満ちた希望をもって公務員になったなどときれいな事を言う気もない。しかし、社会全体の健全な発展に貢献したいという強い意思があったことは確かである。

さて、公務員試験は一次を通れば大丈夫と思われがちだが、二次も意外と厳しい。元年度採用の試験でも、一次合格者のうち最終合格は三分の二である。二次のポイントは集団討論であり、これは、意見を述べないのはもちろんのこと、欲張りすぎてもだめである。公務員に求められているのは、何をおいても「協調性」なのである。

ところで、公務員試験に合格した後は、3月の内定まで特に何も無いが、10月ごろ、就職希望の有無及び配属先の意向調査がある。そのときに、どのような仕事につきたいかを書くことになるが、これは、はっきりと書かなければならない。希望どおりになるとは限らないが、あいまいな事を書いていると、どこへ行かされるかわからないからである。

それでは、実際に仕事についてみて感じたことを挙げてみる。まず、残業が多いということである。「公務員は5時に帰れる」という概念は、県庁においては成り立たない。本庁、出先、その他部や課の違いにより差はあるが、私の場合、7時～8時が平均である。同期の友達の中には、10時11時は当たり前という人もいる。先日、新聞の投稿欄を見てい

ると、この残業の多さと安い給料を批判して、「人間らしい生活をしたなら公務員にはなるな」という過激な投稿があり、納得せずにはいられない部分もあった。また、営利を追求しない公務員は、仕事の「はりあい」の点で民間企業に劣るといえるかもしれない。特に、はじめのうちは、自分の仕事が行政の一端を担っているとはなかなか感じられないのではないか。仕事は生活の手段と割り切って考えることもできるが、これから何年も従事していく仕事が、はりあいのあるものでなくてはつまらないのである。

しかし、公務員の仕事が面白くないというわけではない。公務員の仕事は多種多様である。県庁には、土木・農林・商工・環境保健教育・企画振興等々があり、それぞれ「県民のため」という基本構造の上に、様々な分野の行政を担っている。県職員であるからこそ「海島博」のスタッフとなるような夢のある仕事にもつけるのである。また、職務の独自性も魅力である。「この道狭くて危険だな」と思っても、行政機関が手がけない限り、誰も道路改良などやらない。「公務員がやらねば誰がやる」なのである。

私が県庁に就職してから、すでに4か月が過ぎようとしている。まだまだわからない事ばかりで、戸惑うことも多いが、「広島県の一般行政をつかさどる機関は、広島県庁だけである」ということに誇りを持ち、一方で、県民の福祉の向上に寄与することの責任の重大さを痛感しながら、広島県行政に不可欠の人物となるよう、日々努力していくつもりである。